



長 浜

特定非営利活動法人
花と観音の里

観音の里に花の景観とにぎわいをつくる NPO法人が核になり、元気なまちづくり活動

「観音の里」として知られる長浜市高月町。商店街の衰退、若者の流出などの課題に
対して、特定非営利活動法人「花と観音の里」が中心となり、10年前から活性化事業
に取り組んできた。自由に意見を出し合い、住民が楽しみながら活動をする「まち
まを元気にしている」。

アクセス向上の好機を逃さず 高月駅を起点にまちの活性化を図る

長浜市北部の高月町には、渡岸寺観音
堂(向源寺)の国宝十二面観音立像をはじめ、奈良・平安時代までさかのぼる多く
の貴重な観音像が寺院や仏堂に祀られて
いる。いずれも地域の人々の手によつ
て、いくつもの戦乱を越え、現在まで献身
的に護り伝えられてきたものだ。

わずか約40kmの町内で、その数はなんと
30体以上。そんな「観音の里」と称される高
月町に、「観音様が微笑むにぎわいとふれ
あいのまちづくり」をキャッチフレーズに
特定非営利活動法人 花と観音の里が設
立されたのは、平成17年12月(NPO法人



(上)観音様を巡るツアーを検定試験前に開催
(下)参考書を片手に観音検定試験に臨む参加者

認証は平成18年3月のことだった。

当時、高月町では、昭和60年頃から国
道沿いに大型商業施設が進出し、商店街
の衰退が顕著になっていた。ところが平
成18年10月にJR北陸本線交流電化区
間が直流方式に切り替わり、高月駅へ京
阪神から直接乗り入れることができる
ようになった。新快速の延伸もあり、湖
北の交通の便は格段に向上。これに合わ
せて、高月駅の駅舎も新しくなった。

高月町と高月商工会が中心となって、
中心市街地活性化法に基づく基本計画
をまとめ、国の認定を受けてまちの活性
化を目指すことにした。そして、その推進
を中心的に担う組織として設立された
のが、花と観音の里だった。

長浜市への編入で計画は頓挫 「町を元気に」の原点に帰る

度からこの施設の管理者となり、地域で
活用してもらうための管理・運営を担う。
しかし、平成22年、花と観音の里の活
動は転機を迎える。平成の大合併だ。高
月町が他の6町とともに長浜市に編入
されたのだ。中心市街地活性化法では、
基本計画が認定対象となるのは1自治
体で一つが原則。編入によって高月町は
対象から外れてしまった。「ショックだっ
た。国からの援助を取り付けて強力に推
進しようという構想が頓挫してしまった。
でも、まちを元気にしようという思いを
ベースにずっと続けてきたことだから、
その原点に戻って、自分たちでできるこ
とをやってみよう」と、気持ちを切り替え
たと、中川定次前代表理事は当時の心
境を語った。

定期的なイベントとしては、平成19年
から「観音寄席」を開催。「国宝の観音像
がある高月町だから、人間国宝の落語家
さんをいつか呼びたい」。そんな思いで生
まれた企画だが、寄席を生で観ることの
できる絶好の機会として、毎回、満員御
礼の人気を博している。

寄席の会場は高月共同福祉施設「サン
レイバー高月」。花と観音の里は、平成18

花も笑いも咲くまちづくり

「観音検定」で観音文化に親しむ

花と観音の里は設立からすぐに、まち
を元気にする活動に取り組んだ。まずは、
高月駅周辺の未利用の土地を借り受け



植え替えて季節の花を咲かせ、見る人を和ませる高月駅の花壇

て、花壇を整備した。現在は五つの花壇の
手入れを交代で毎日行う。個人や子ども
会などの団体が手入れしている花壇を、
認定花壇として認定証を授与する活動
も始めた。
JRの直流運転に合わせるように、平

活動を着実に継続し、 会員拡大でさらなる活力を生む

こうして活動の意義を再確認し、花と
観音の里はその後も地道に活動を継続
した。花壇の整備では、町内の障がい者福
祉作業所に育苗を委託するなど、花を通
じた地域内での新たな連携が生まれた。
観音検定、観音寄席は地域の行事とし
て完全に定着。今年の検定は11月15日に
第10回を、寄席は12月5日に第9回を開
催する。5年ごとに業者の選定が行われ
るサンレイバー高月の指定管理者につい
ても、平成32年までの更新が決定した。

また、町内の小中学校で英語を教えて
いるALT(外国語指導助手)の外国人
の方々の協力を得て、昨年からは2回の
英会話教室をサンレイバー高月で実施し

ている。これは、語学力をつけると同時に、
地域の中で国際交流をしようというもの
で、参加者が毎回30人を超える人気だ。
これらの活動が認められ、「観音文化
の振興に寄与」として、平成26年度
の長浜市社会功績者表彰を受けた。
「活動を継続できているのは、いい仲間
づくりができたから。会の中心はやはり
“人”。この輪が広がっていけば、もっとい
ろいろなことができる。だから、今は会員
を増やすことに力を入れている。会員数
はもうすぐ80人。最近は町内に地域活性
化を目的とした若い人のグループも生ま
れた。若い世代とも交流を図り、その活
動のバックアップを私たちができればと
思う。まちを出た若い人が戻りたいと思
える、元気があまるまちづくりをしてい
きたい」と那須康也代表理事は話す。



毎回満員御礼で大盛況の「観音寄席」



ALTの教諭や地域の人々との交流を図る「国際交流フェスタ」